



田植え機に装填する苗（なえ）をあぜ道に並べながら、霞ヶ関の往來を思い出す。

前職、あの街で農業に関するニュースを追いかけていた。

軽トラも長靴も見かけない「農」から遠く離れた都心。

通勤と職場（現場）への移動は電車かタクシー。

5月ともなれば地下鉄のホームは排ガスを濾（こ）したような人工的な空気に満たされ、外に出ればアスファルトが熱気を照り返してくる。“東京”で過ごした日々で「土」を見かけた記憶があまりない。

米どころ新潟の米の兼業農家の家に生まれて「新潟一番！」とか言っていた自分が高校卒業以来、コンクリートの街で生活することに罪悪感とまでは言わないものの、ある種の皮肉を感じていた。

もちろん、“地方”に大きな影響を及ぼす都心発のニュースを追うことにやりがいも感じていた。

輸入自由化、少子高齢化、担い手問題・・・課題山積。

地元の、とりわけ産業を思う時は、いつもそんなキーワードに囲まれていた気がする。

「陽気で力強い次世代が地元がたくさんいたらいいのに」「その地元を離れた自分はどうか」どうにも割り切れなかった。

そんなわけで、前にも後にもいずれは地元に戻ることを心に留めながら都会を歩いていた。それにしても、地元が元気であってほしいという感情を持つことは、当たり前のように不思議なことだ。

2016年春。ゴールデンウィークの越後平野は今年も美しい。

苗を積んだ軽トラが農道を走りまわり、空を映す水田を田植え機がうっすらと緑に塗り替えていく。

少し色あせたパラソルがあぜ道に花を咲かせている。お手製の日陰の下で和む一家を遠目に見、ありふれた光景ながら涙が出そうになる。

物悲しいのか感動しているのか自分でも分からない。ただただ美しいと思う。

専業農家だった祖父母が亡くなってから、我が家は父が中心となって兼業農家になった。新潟県の農業従事者は70~74歳が中心で、我が地元でも父は「若手」として迎えられた。それから10年経った今でも、祖父母世代の“先輩”方が何かと世話を焼いてくださる。実のところ、学生時代は農業を学び、仕事も農業に非常に近い職場を選んだ。「営農」を引き継いだ時から、知識も経験も申し分なかったはずである。

農作業のねぎらいに、その“先輩”方に招いていただいたり招いたりして食事を共にする機会が年に数回ある。

同席させていただくと実に面白く、また感心する。

例えば、農業の話、地元の昔話や現在について。

酒に酔っても話がまったくブレない。愚直さというか一生懸命さというか、ひしひしと伝わってくる。

何か、湧き出るようなエネルギーの地脈が地元の土の下に縦横無尽に走っている気がした。

ふるさとは何かがある。